

テネシー・ウィリアムズ：
その作品の中の自画像

—『ガラスの動物園』
『欲望という名の電車』の場合—

丸 田 明 生

(1)

テネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams) は、その『回想録』(Memoirs)の中で次のように云っている。

人々はくりかえし私の作品をあまりにも私的であると言いつづけてきた。それに対して私も再度芸術家の真の作品はすべて私的なものでなければならないと反駁してきた。直接に表わすか、婉曲にのべるかの違いはあっても、作品はすべてそうあるべきだし、又実際創作した人間の情緒的風土を反映するものである。¹⁾

本論では、かく言うウィリアムズ自身の私的なものが、彼の人生の、どちらかといえば前半の作品『ガラスの動物園』(*The Glass Menagerie*)—1945年初演—と、『欲望という名の電車』(*A Streetcar Named Desire*)—1947年初演—の中でどのようにあられ、そして昇華されているかを考察しようとするものである。『ガラスの動物園』は、ウィリアムズの半自

伝的作品であるというのが定説になっっているが、それではどのような形で作品としてそのパーソナルなものがその中で鼓動しているのか、又『欲望という名の電車』は、『ガラスの動物園』と異なり、多分に客観的作品であるという点で評価する批評もみられる。²⁾しかし、それではこの作品の中に私的なものが織り込まれていないのか。ウィリアムズの私的なものは、あるものはそのまま作品の中にあらわれて真実を示し、あるものは客観性の「錯覚を起させておいて」はいるが、実はやはり作者のパーソナルな事実から生まれた叫びではないのか。真実なるものには揺がない事実と体験を通してのみ迫られるのではないか——。

『ガラスの動物園』の語り手であるトムの次の言葉は又ウィリアムズの言葉である。「手品師ってやつは、いかにも真実らしいみせかけで錯覚を起させてしまう。ところが僕は、楽しい錯覚を起させておいて真実をお見せするのです。(He gives you illusion that has the appearance of truth. I give you truth in the pleasant disguise of illusion, *The Glass Managerie*, Scene I)

再び『回想録』の言葉にもどるとすれば、その「真実」はまさに私的なものにある、ということになる。

『ガラスの動物園』はどちらかといえば単純な物語である。夢をもったトム・ウィングフィールドは母と姉に縛られて、その生活を支えるために止むなく靴会社に勤めている。彼等の父がある日突然家をとび出してしまったからである。トムはそのために自分が如何にこの家のために必要な人間であるかを知ってはいるが、しかし自分自身の将来のためにはこの家を出なければならないと思っている。「彼の性質は冷酷ではないが、罠から逃れるためには憐れみをもってはならない」(His nature is not remorseless, but to escape from a trap he has to act without pity; *The Glass Managerie*, The Characters) のである。母のアマンダは二つの世界に住んでいる。過去の楽しい夢、1日に17人の紳士が訪問した思い出と、現

実の支払いに追われ、靴問屋に勤める詩人の息子と、きびしい現実から逃避し、ガラス細工のコレクションを見つめ、古いレコードを鳴らしに走る娘をかかえた生活。娘のローラに相手を見付けなければというアマンダの執拗さにトムは遂に同じ会社のジム・オコーナーという青年を連れて家に帰る。ほんのしばらくの間、ローラはこの青年によって「ガラスの動物園」の世界から出てくるが、ジムが、自分が間もなく結婚しようとしている相手がいると語ることによって、彼女の束の間の希望は断たれてしまう。がみがみと叫ぶ母を尻目に、トムはローラに後髪を引かれながらも父と同じ道をたどることになる。

ここで、T. ウィリアムズの生いたちを簡単に述べることは、本論の性格上必要であろう。南部なまりがひどかったという彼は、9歳の時までミシシッピ州の母方の祖父 Walter E. Dakin の牧師館で過した。彼の子供時代の生活はこの祖父が彼をととても可愛がってくれたこともあって大変幸せであったらしい。ウィリアムズの母 Edwina Dakin Williams の口述による『トムに私の思い出を』(*Remember Me To Tom*) に、ウィリアムズがこの時代の思い出を書いた文として次のものが載せられている。

私が8歳の時私の生活には完全に恐怖の影がさした。私はミシシッピの小さな町に住んでいた。母と姉と私は祖父母のところで生活し、父は紳士服をあきなう商売のためミシシッピを駆け回っていた。姉と私はとても幸せだった。洗濯桶に紙の舟を浮かべ、大きな注文商品用のカタログできれいな色の紙人形をつくり、裏木戸に2匹の兎を飼い、アプローチの上で泥パイを日光で焼き、大きな材木の山にのぼったり、下りたり近くの小路やがらくたの山から色ガラスの破片を集め、それらはダイヤモンドや、ルビーや、サファイアやエメラルドとなった。そして夕方には、眠る前、白い月あかりが私達のベッドにさし込むと、月のないミシシッピの夜のように暖かくて色の黒い黒人の乳母のオズイが私達のベッドの上にかがみ込んで、低い、ゆたかな声で、人間のように振舞うきつねや、熊や兎や、おおかみの驚くべき物語をしてくれるのだった。³⁾

しかしウィリアムズが9歳の時、父がセントルイスの International Shoe Company という靴会社に移ったため、母と姉のローズと4人でその都市に移り住むことになる。これは父コーネリアス (Cornelius) が、これまでのように旅回りをする必要がなくなったためである。しかしこのセントルイスの彼等の住居は今までの牧師館の広々とした環境とは対象的な狭苦しいアパートであった。そして『ガラスの動物園』のトム達の住家こそそのアパートのモデルに外ならない。そのアパートの様子をウィリアムズは怒りをこめてでもあるかの如く、この作品の冒頭のト書に次のように描写している。

ウイングフィールド一家はアパートの裏部屋に住んでいる。それは中流階級の下の人々が住む都会の密集した地域にいは状の突起物のように繁茂し、アメリカ社会の、最大のそして本来いためつけられた階層の衝動を示しており、変化と差異を嫌い、融合した無意識のかたまりのように存在し機能するあの蜜蜂の巣のような生きた細胞をおしならべたような建物の一つである。

(The Wingfield apartment is in the rear of the building, one of those vast hive-like conglomerations of cellular living-units that flower as warty growths in overcrowded urban centres of lower-middle-class population and are symptomatic of the impulse of this largest and fundamentally enslaved section of American society to avoid fluidity and differentiation and to exist and function as one interfused mass of automatism. Tennessee Williams: PENGUIN PLAYS, scene 1)

この記述は1918年当時のアメリカの社会事情をもうかがわせるものであり、同時に、ウィリアムズがこれまで過してきた環境との乖離と、やがてトムがこの世界から逃げ出したいくなる衝動の一半を十分推察することができる。

1929年、ウィリアムズはミズリー大学に入学する。彼には1つ年下の Hazel Cramer というガールフレンドがいて、ウィリアムズは彼女も1年

後にはミズリー大学に進学してきてともに楽しい大学生活を送ることを夢みていた。その間の模様は母エドウィナによって次の如く語られている。

ヘイゼルは生活の喜びに満ちていた。それは幼い頃のローズにも似ていた。私
が今までに会った最も健全な女の子の一人だった。彼女は少し赤みのかかった髪
と大へんきれいな肌をしていた。彼女とトムとの友情はもしコーネリアスが邪魔
しなかったらロマンスの花を咲かせていたかも知れなかった。というのは、コー
ネリアスはヘイゼルをトムにふさわしい女性とは思っていなかったからである。
彼女の両親は離婚していて、彼女は祖父と住んでいた。祖父はインターナショナ
ル・シュー・カンパニーの販売部門に勤めていて、コーネリアスの部下だった。⁴⁾

こゝではウィリアムズの勉学の妨げになるといって、父が同じ会社の部
下であるヘルゼルの祖父に圧力をかけて彼女を彼から引離したことになっ
ている。ヘイゼルは結局ミネソタ大学に入学し、やがては別の男性と結婚
することになる。

しかし、ウィリアムズ自身はヘイゼルのことをどのように述べているで
あろうか。

ヘイゼルは茶色のうるんだ目をした赤毛の髪をし真珠のような透き通った肌を
していた。彼女は驚く程美しい足の持主で、胸は早くからふくらんでいた。彼女は
(バターボールを思わせる)母親に似て太るタイプのようなだったが、背はかなり
高く、事実私が16でヘイゼルが14の時、既に私より高くなっており、私と一緒に
人前を歩く時は少し体を曲めて私に身長之差でいやな思いをさせまいと、前か
がみになって歩くくせができてしまっていた。

私は正直、後年同性愛が始まったが、彼女が私の生活の中で家族以外では大き
な愛をささげた人だったといえると思う。

私の母は私のヘイゼルへの愛をそれが進むにつれて認めなくなったし、又その
点では私がどんな友達を持つのも嫌がっているようだった。男の子はデリケート
な息子には荒っぽ過ぎたし、女の子は勿論「下品」だったのだ。

このことは又姉の友情やささやかなロマンスに対するミス・エドウィナの態度にもあてはまるように思う。そしてローズの場合、もっと悲劇的な結果になってしまった。⁵⁾

以上の2つの引用によれば、ヘルゼルとウィリアムズの間には立ちが違った人物に違いがみられる。コーネリアスなのか、エドウィナなのか。それはウィリアムズの作品の中に探られねばならないであろう。

ウィリアムズはミズリー大学3年時、3年間の自由すぎる生活—多分セントルイス時代の反動でもあろう—のため、学業成績は芳ばしくなく、その上陸海軍予備役将校試験にも不合格となったため、父からこれ以上大学を続けさせるゆとりはない、と宣言され、父の就職先である靴会社で働かされることになる。この靴会社の勤務が彼にとって如何に堪え難いものであったかは、『ガラスの動物園』が雄弁に物語る。

僕はじっとしちゃいけないんだ。胸の中が煮えたぎり始めているんだ。僕が夢をみているようにみえるのはわかっている。だけど、胸の中は——そうだ煮えくりかえているんだ。靴を手にとる度に、人生は如何に短く、今僕が何をしているのかを考えると少し震えてくるんだ。人生が何を意味しようとも、それが靴を意味しないことは確かなんだ。旅行者の足にはくものとして以外には！

(I'm starting to boil inside. I know I seem dreamy, but inside—well, I'm boiling! —Whenever I pick up a shoe, I shudder a little thinking how short life is and what I am doing! —Whatever that means, I know it doesn't mean shoes—except as something to wear on a traveller's feet! Scene VI)

トムは『ガラスの動物園』の登場人物の一人ではあるが、又語り手でもある。トムが登場人物の一人であるのは、この作品が具体的に自伝的であるという性格からのものであり、又語り手であるというのはいうまでもなく作家としての態度である。しかし、ウィリアムズの当時の将来に対する

激しい希望と情熱は、この作品中の唯一人のウイングフィールド家以外の人物ジムの言葉に読みとれるといえよう。換言すればこの「紳士の訪問者」ことジムこそウィリアムズの内なる言葉を代弁する人物なのである。「なかなかやって来ないがいつも訪れることを期待して私達が生きているもの」(the long delayed but always expected something that we live for, Scene I)、それが「紳士の訪問者」なのであり、これから一人前の劇作家として認められようとする彼の胸の中にたぎりたつ炎がジムを通して語られるのである。

劣等感! それは何であるか知っていますか。それは自分を過小評価する時によぶ言葉ですよ。私も又それにとりつかれていた時があったからわかるんです。私の場合はひどいものではありませんでしたがね。私は弁論術を勉強し、発声の練習をし、私に科学の才能があることを知るまでそれにとりつかれていたんです。それ以前は、自分のことをどの面でも決して優れているとは思いませんでした。(Inferiority complex! Know what that is? That's what they call it when someone low-rates himself!

I understand it because I had it, too. Although my case was not so aggravated as yours seems to be. I had it until I took up public speaking, developed my voice, and learned that I had an aptitude for science. Before that time I never thought of myself as being outstanding in any way whatsoever! Scene VII)

ウィリアムズがこの作品中如何にジムを中心に考えていたかは、この作品名は最初“*The Gentleman Caller*”であったことから明らかである。⁶⁾

ウィリアムズは幼い頃ジフテリアを煩って九死に一生を得たこともあり、体は大夫ではなかった。そのためもあって性格も控え目で学校友達からは“sissy”とあざけられたりもしていた。⁷⁾これがジムの言う劣等感を彼の心に植えつけていたと思われる。けれども彼が28歳の時、ニューヨークの

「グループシアター」という演劇協会に送った懸賞劇曲が入選し、彼は100ドルの賞金を得ることになる。そしてそれがきっかけとなってロックフェラー財団から1,000ドルの奨学金をもらうことにもなったのである。さきの引用の中で、ジムの言う「ところが弁論術の講義を聞いて、音声を訓練する——また科学方面に適性のあることがわかってくる」云々という部分は、この懸賞作品入選や奨学金への推挙により、自分に劇作家としての才能のあることを自ら認めたことへの確信を語っているものと思われる。

先んずれば人を制す——僕は業界のパイオニアになることを目指しているんです。ちゃんと適当なコネクションもできましたよ。あとはテレビそのものが発展することだけです。

(彼の目は輝く)

知識——ヨーシ！ 金——ヨーシ！ 力だ。

このようにして民主主義は回転していくのです。

.....

僕って、ずい分うぬ惚れの強い人間だと思うでしょうね！

(I wish to be ready to go up right along with it. Therefore I'm planning to get in on the ground floor. In fact I've already made the right connexions and all that remains is for the industry itself to get under way! Full steam—

[His eyes are starry.]

Knowledge — Zzzzzp! Money — Zzzzzp! —Power!

That's the cycle democracy is built on!

.....

I guess you think I think a lot of myself! Scene VII)

これらは劇中でローラ (Laura) に語りかける台詞ではあるが、劣等感から既に脱出し、自信のみなぎるウィリアムズの姿がみられる。「適当なコネクションもできましたよ」というくだりは、グループシアターの John

Gassner や Theresa Helburn と知り合いになれたこと、Miss Audrey Wood という有能なエイジェントが彼についたことを意味しているのであろう。⁸⁾ そして彼は今や「知識」と「金」に対する自信も深まり、あとは自分にも世の中への影響力が生まれることを予感しているのである。「どうです——この回転！ これで民主主義が栄えるんです」という台詞は、自分と民主主義アメリカへの讃歌となっている。

しかしジムのこの自信の表われもそこまで到達するまでに大きな挫折を味わわなければならなかった。トムはジムについて、「この男は30にもなれば小くとも大統領位には当然になっているだろうと誰でもが思っていたに違いありません。ところがどうしたわけか、ハイスクールを出るとスピードはがた落ち——さすがのジムにも世の中はままにならなかつたとみえます。倉庫に勤めていた当時も僕と大差ない、うだつのあがらない仕事をさせられていました。」(He was shooting with such velocity through his adolescence that you would logically expect him to arrive at nothing short of the White House by the time he was thirty. But Jim apparently ran into more interference after his graduation from Doldan. His speed had definitely slowed. Six years after he left high school he was holding a job that wasn't much better than mine. Scene VI)

ハイスクール時代の英雄であったジムが、現在このようにみじめな状態に置かれているという設定は、ウィリアムズが16歳で書いた「エジプトの女王の復讐」(“The Vengeance of Nitocris”)が雑誌に初めて掲載された⁹⁾ことにヒントを得たものであろう。しかしその後のジムの零落は作者のデビュー作として書きあげた長篇劇『天使の闘い』(Battle of Angels) — 1940年初演 — の失敗と符合する。ウィリアムズは失意の中、その印税の半分を持って放浪の旅に出ている。ジョージア州、ワシントン市、フロリダなど転々とし、一時はハリウッドのシナリオライターの仕事もした。しかし成功しなかった。その旅の様子は『ガラスの動物園』の最後に極めて情

感をこめて描かれている。

…僕はずいぶんと旅をしました。町々が枯葉のように僕のまわりを飛び去って
いきました。美しい色をしていましたが、枝からもぎ取られた葉でした。

僕は立止まることもしたでしょうが何かに追っかけられていました。それはいつ
も不意に僕に襲いかかり僕を驚かすのでした。多分それは親しい音楽の一節だっ
たでしょう。透明なガラスのかけらにすぎなかったでしょう。

多分僕は夜ある見知らぬ町の通りを歩いているでしょう。そして仲間をみつけた
でしょう。僕は香水の売られる店の明りのついた窓を通り過ぎるのです。窓には
色のついたガラスの瓶が一面に並んでいます。ほのかな色をした透明なかわいい
瓶です。まるで虹のかけらのようです。

すると不意に誰かが僕の肩に手を触れるのです——ローラです。僕は振り向いて
彼女の目をのぞき込みます。

おゝローラ、ローラ、僕は君を後に残すようなことをしてしまった。しかし僕は
驚く程君のことを思っているのに気づくのです。

(...I travelled around a great deal. The cities swept about me like dead
leaves, leaves that were brightly coloured but torn away from the
branches.

I would have stopped, but I was pursued by something. It always came
upon me unawares, taking me altogether by surprise. Perhaps it was
a familiar bit of music. Perhaps it was only a piece of transparent
glass—

Perhaps I am walking along a street at night, in some strange city,
before I have found companions. I pass the lighted window of a shop
where perfume is sold. The window is filled with pieces of coloured
glass, tiny transparent bottles in delicate colours, like bits of a shattered
rainbow.

Then all at once my sister touches my shoulder. I turn around and look
into her eyes...

Oh, Laura, Laura, I tried to leave you behind me, but I am more faithful

than I intended to be! Scene VII)

こゝには旅の中のウィリアムズの将来への焦燥と不安、旅情と寂寞が万感をこめて述べられている。それと同時に彼の姉ローズ (Rose) —— 作品中ではローラ (Laura) に対する切なる愛情が胸を打つ。

ここでウィリアムズのローズに対する愛情の系譜をたどってみよう。

ところで私の姉ローズの悲劇は、私が大学を3年中退してインターナショナル靴会社支社のコンチネンタル製靴会社で働くことになる数年前に始まった。

ローズが数年にわたって原因不明の胃腸疾患に悩まされていたことは既に書いた。彼女はこの消化器の病気のために何度か入院したが、潰瘍はおろか、具体的な原因はついに発見できず、最後には精密検査のための手術をした方がよいと勧められた。

幸いなことにわが家のかかりつけの医者が——それは有能な医者だった——この問題に立入り、ローズは精神科の診察が必要だ、その不思議な消化不良は精神医学的もしくは精神身体医学的理由によるものと思われる、というのが彼の(正しい)意見だった。

母はすっかり狼狽した。...¹⁰⁾

『ガラスの動物園』のローラは、精神病ではなくびっこで内気な女性として描かれている。この劇の創作期においてローズを精神病患者として描くことはウィリアムズにとって堪え難いものであったことは容易に察知することができるけれども、「ガラスの動物園」と「古いレコード」の世界に閉じこもるローラの姿に精神の異常の何かが読みとれなくはない。又ウィリアムズは、「……私の考えでは、ミス・ローザはある青年を好きになったのだが、男の方が必ずしもそれに応じてくれなかったのだと思う。ともかくそのあとローズは人が変わってしまう。彼女の上に暗い影が覆いかぶさり、その後4・5年、ますます暗さが深まるばかりだった」と述べてい

る。¹¹⁾

更に『回想録』は語る。

ローズには<本格的>なボーイフレンドができた。インターナショナル社の副部長、風采も立派でマナーもよく、そしていささか無謀な野心を抱いているように思える若者だった。数ヶ月の間彼はローザにやさしく振舞った。デートの数も週に一度や二度ではなかったと思う。ほとんどステイの間柄になっていた。電話が鳴れば、ローズは身を震わせて彼からかかってきた電話であってほしいと必死に祈ったものだった。

.....

しかしここにスキャンダルものの事件が起った。ホテル・ジェファソンの徹夜のポーカーパーティーで父が片耳を失い、形成外科で外耳を整えた事件だ。これを境にして、父がインターナショナル社の重役のポストに昇進する可能性は全く断たれたのである。

これはローズのあのハンサムで意欲的な恋人とのデートの終りを意味するものだった。彼がもはや彼女の夫となる可能性はなくなったのである。¹²⁾

ウィリアムズは「紳士の訪問者」のヒントをこの青年から得たものであろう。しかしこの青年を作品中に描いたように彼が母の要請によって家に連れ帰ってローズに紹介したかどうかは明らかでない。あるいはそうであったかも知れない。ただ母エドウィナは既にいくらかの傷害の出始めているローズの伴侶を見付けるべく、この時期においてはあの劇中の如く必死の思いで訪問者を迎えたことは想像に難くない。しかしローズは結局父のスキャンダルと失恋という手痛いショックの中で益々その精神の病いを急激に加速していったものと思われる。そしてこの間のウィリアムズの感情と判断を私は『欲望という名の電車』の結末の部分に見ることができると思う。

エドウィナは、「ローラと違って、ローズは決して内気な子ではなかった。彼女はゲームではリーダー格だったし、とても元気だった。彼女の父

のことに關しては時々はげし過ぎる位だった¹³⁾」と述べ、更に「二人の性格はとても違っていた。ローズは激しい気性で、トムは静かだった。彼の劇の強烈さにも拘らず、今もそうである。彼の救いは身の廻りで見、感じる争いを言葉で表現できるということだったと私は思う¹⁴⁾」と分析している。これは正しい判断だと思う。ウィリアムズは書くことのカタルシスによって彼をとりまく暴虐の世界から身を守ったとも言えるからである。

(2)

『ガラスの動物園』では、以上論考した3人の登場人物の外にウイニングフィールド家の両親が登場する。その中の1人、壁に掲げられた写真の中に入っている父親について考えてみたいと思う。¹⁵⁾ 勿論ウィリアムズの父のモデルである。ウィリアムズはこの劇曲では父を家出させ、自分より距離を置いた存在としている。しかしウィリアムズ一家がセントルイスで狭苦しいアパートで生活していたこの時代、父は彼等と同居しており、靴会社の支店販売部長としてもはや旅廻りをする事はなかったのである。然らばこの父の不在は何を意味するであろうか。

先に述べたように、父コーネリアスはウィリアムズに大学を中退させ靴会社に就職させた。そしてその就職先は彼にとっては堪えられないものだった。その上、ローズの精神異状の原因の一つに父のスキンダルがあった。しかし何故かウィリアムズはこの劇の中で父をたゞ思い出させる存在として登場させ、その写真の顔には微笑みさえ浮かせている。彼を家出させているのは、父に対する遠慮或いは父の權威に対する恐れともいふべきものがあつたのだろうか。それとも、父のいろいろの負のイメージにもかかわらず、父に曳かれる何かが存在したのだろうか。

ウィリアムズは父の家柄について次のように述べている。

父の家柄は、現在はいささか色褪せたにしてもはなやかなもので、少くとも名は通っていた。父はテネシー州の初代上院議員でキングズ・マウンテンの英雄ジ

ジョン・ウィリアムズや、テネシー州の最初の知事ジョン・セヴィアの弟バレンタインや、西部領地（テネシー地方が州になる前の呼称）の初代長官トマス・ラニア、ウィリアムズ一世の直系だった。公刊された系図書によるとセヴィア家はナヴァル王国にまで遡ることができるし、そこで一族の一人はブルボン王家の後見職にもなっている。この一家は後に宗教上ローマン・カトリックとユグノーの二派に別れた。カトリック派はザヴィエルの名のままだったが、ユグノー派は聖バルトロメンの大虐殺の時にイギリスに逃れてセヴィアと名を変えた。中国人多数を改宗させたことで有名なフランシスコ・ザヴィエルは——勇敢だけれどもドン・キホーテ的冒険というのが私の意見だが——わが家族の中で世界的名声に最も近い人物である。

父方の祖父トーマス・ラニア・ウィリアムズ二世は、テネシー州知事へ打ってでて、武運つたなく彼自身と妻の財産をなくすことになった。¹⁶⁾

又、ウィリアムズは「父の人柄の不愉快な面を数えあげたらきりがないだろうが、それより断然抜きんでて二つの大きな美德が——遺伝的なものであって欲しい——あったように思う。すなわち、人に接する時本心から誠実であること、真実であることの二点である¹⁷⁾」とも述べている。彼がとても気に入っていたという「テネシー」というペンネームもその理由の一つに父の家系のルーツであるテネシー州を頭に描いていたのかも知れない。又ウィリアムズが遺伝的なものであって欲しいという「他人に接するとき本心から誠実で、真実であること」は、ウィリアムズの人柄に受け継がれているようにも思われる。そしてこのような父に対するアンビバレンスは、『欲望という名の電車』の中でスタンレー(Stanley)という登場人物に結実したのである。

『欲望という名の電車』のあらすじはあらためて紹介するまでもないが、今は消滅した南部のプランテーションに生まれ育ったブランチ・デュボア(Blanche DuBois)が、身一つとなって妹のステラ(Stella)夫婦をたよってニューオーリンズにやってくるところから始まる。妹ステラの夫スタンレーはポーランド人で粗暴な男である。彼は連夜のように仲間とポーカ

ーをやり、酒を飲む。そしてランチが屋敷を人出に渡して彼等のところに転がりこんだことを快く思わない。気位の高いランチとスタンレーは常に衝突する。ランチはスタンレーの仲間の中にミッチ (Mitch) というやさしい男を見付け、彼と結婚しようとするが、今までの素行をスタンレーにあばかれてミッチに捨てられ、妹ステラが出産のため入院中にスタンレーに犯され、気が触れて精神病院に送られていくのである。

父コーネリアスをウィリアムズはスタンレーの中に描いたと想像されることは既に述べた。然らばスタンレーの中にどのようにコーネリアスが読みとれるだろうか。

ウィリアムズは父の粗暴さの原因を次のように分析している。

私の父コーネリアス・コフィン・ウィリアムズは、美しい母イザベル・コフィン・ウィリアムズが28歳の時結核でなくなったので、母というものの心をなごませてくれる影響を殆んど受けずに育った。その結果彼は粗暴でがさつな性格になった。それはベルバックルのミリタリー・アカデミーでも直らなかった。そこでは彼は規律違反のため倉倉に入れられてばかりいた。そこで彼はカブラだけを食べきせられ、それは後に私達の食卓では御法度となった。1年か2年テネシー大学で法律を学んだ後、米西戦争では少尉に任官したが腸チフスにかかり、髪の毛を殆んどなくしてしまった。母は父が酒を飲む前はハンサムだったといっているが、私は酒を飲まない父や、ハンサムな父にはお目にかかったことがない。

しかし深酒もミシシッピのセールスマンにはマイナスにはならなかった。電話会社に少し勤めた後、彼は靴のセールスマンになった。その道では大いに人気を博し成功もした。その間に彼はポーカーと浮気女の味をおぼえ、母を悩ますもう一つの原因となった。¹⁸⁾

幼くして母を失った不幸にも遭遇して、コーネリアスは荒っぽい人間に育ったのだが——その点ではウィリアムズはスタンレーをポーランド移民という設定で父への配慮をしている——しかし仕事の面では最優秀、人気も抜群だった¹⁹⁾。その点については次の台詞が証明する。

ブランチ：見込みありそう？

ステラ：ううん、あの人達の中で物になりそうなのはスタンレーだけよ。

ブランチ：どうしてスタンレーだけ？

ステラ：だって見てごらんさないよ。

ブランチ：見たわよ、わたし。

ステラ：そんなら、わかるでしょう。……

.....

ステラ：エネルギーよ、あの人の……

(BLANCHE: Is that something much?)

STELLA: No. Stanley's the only one of his crowd that's likely to get anywhere.

BLANCHE: What makes you think Stanley will?

STELLA: Look at him.

BLANCHE: I've looked at him.

STELLA: Then you should know

.....

STELLA: It's a drive that he has. Tennessee Williams: PENGUIN PLAYS, Scene III)

この人物の「エネルギー」を更に鮮明にウィリアムズは描く。

…スタンレーは台所の網戸を乱暴に押しあけて入ってくる。彼は約5フィート8インチか9インチの中背の男で、頑丈で引き締った体格の男である。動物的生への喜びが彼のあらゆる動作や態度にこもっている。成熟期の初期から彼の生活の中心は女によるこびを与えること、そしてそれを受けとることにあった。それも受身的に弱々しくそれに溺れることではなく、めんどりの中の雄どりの豪華な羽根の力と誇りをもってのものだった。この完全で満足のいく中心から彼の生活のすべての派生的な枝が広がる。それは男友達との心のこもった交友、野卑な冗談をとばすことへの満足、よい酒や食物やゲーム、車、ラジオ、そのはなやかな雄の紋章をつけたすべての物への愛がそれである……

(STANLEY *throws the screen door of the kitchen open and comes in. He is of medium height, about five feet eight or nine, and strongly, compactly built. Animal joy in his being is implicit in all his movements and attitudes. Since earliest manhood the centre of his life has been pleasure with woman, the giving and taking of it, not with weak indulgence, dependently, but with the power and pride of a richly feathered male bird among hens. Branching out from this complete and satisfying centre are all the auxiliary channels of his life, such as his heartiness with men, his appreciation of rough humour, his love of good drink and food and games, his car, his radio, everything that is his, that bears his emblem of the gaudy seed-bearer. . . .* Scene I)

このスタンレーの描写はコーネリアスのどちらかといえば肯定的な、男性的魅力を伝えている。そしてそれはどちらかといえばウィリアムズのステラ的な眼を通してみられたものと言ってもいい。

これに対して、ウィリアムズは別の眼を通してコーネリアスを見る。それはブランチの眼である。その眼はコーネリアスに対して悪口雑言の限りをつくす。

ブランチ：彼は動物のように行動するわ。動物の習性をしてるわ。動物のように食べ、動物のように動き、動物のように汚すわ。人間以下の——何かがあるわ。まだ人間の段階に達してさえないものが！ そうよ、彼には類人猿のような何かがあるわ。私、人類学の勉強の時に写真見たのよ。何千年というものが彼を置きざりにして通り過ぎたのよ。そして彼は石器時代の生き残りなのだよ。ジャングルの殺戮から生肉を持帰る。そしてあんたは——こゝであんたは——彼を待っている。恐らく彼はあんたをぶんなぐり、うなり、あなたにキスするわ。ただ、その頃キスというものがあったかどうかは知らないけど。夜が来て、外の類人猿が集まってくる。洞穴の前で、みんな彼のようにうなりながら、がぶがぶ酒をのみ、肉をかじり、のそのそと動きまわっているのよ。あんたの言う彼のポーカー

の夜は、類人猿のパーティだわ。誰かがうなる——何かが何かを引っかく——喧嘩が始まる。恐らく私達神の意志からは遠く離れたものかも知れないけど、いゝステラ、それ以来何等かの進歩があった筈よ。例へば——詩や音楽——のような芸術が新しい光を世の中に投げかけたのよ。人々の中にはあの頃よりもやさしい感情が始まっているのよ。それを私達は育てていかなければならないのよ。そして私達の旗としてしっかり握って離してはいけないのよ！ この暗い行進の中で、何に向かってであろうと、私達は進んでいるのよ。．．．獣と一緒にためらっていてはいけないのよ！

(BLANCHE: He acts like an animal, has an animal's habits! Eats like one, talks like one! There's even something—sub-human—something not quite to the stage of humanity yet! Yes, something—ape-like about him, like one of those pictures I've seen in—anthropological studies! Thousands and thousands of years have passed him right by, and there he is—Stanley Kowalski—survivor of the Stone Age! Bearing the raw meat home from the kill in the jungle! And you—*you here—waiting* for him! Maybe he'll strike you or maybe grunt and kiss you! That is, if kisses have been discovered yet! Night falls and the other apes gather! There in the front of the cave, all grunting like him, and swilling and gnawing and hulking! His poker night! —you call it—this party of apes! Somebody growls—some creature snatches at something—the fight is on! *God!* Maybe we are a long way from being made in God's image, but Stella—my sister—there has been *some* progress since then! Such things as art—as poetry and music—such kinds of new light have come into the world since then! In some kinds of people some tenderer feelings have had some little beginning! That we have got to make *grow!* And *cling* to, and hold as our flag! In this dark march toward whatever it is approaching. . . . *Don't—don't hang back with the brutes!* Scene IV)

このブランチの叫びの中にはウィリアムズの声がかかる。そしてそれ

は又父の芸術への無理解を弾劾するウィリアムズの悲痛な叫びのようだ。
ウィリアムズがコーネリアスを念顔にスタンレーをつくりあげた確證の一つは、ステラがランチにスタンレーの兵隊時代の勲章をつけた写真を見せることであり、今一つはスタンレーの仕事に出張が多い、と語ることである。コーネリアスが米西戦争で少尉に任官したことは既に述べた。

ウィリアムズは『回想録』の中で次のような事実を紹介している。

『電車』は1949年11月初めにニューヘイブンで幕をあけた。劇評がどうであるかは誰にもわからず、又誰も大した気にしていない様子だった。ニューヘイブンの初日の後、我々はそのに住んでいるトーン・ワイルダー氏の住居に招かれた。それはあたかも法王の謁見を受けるようだった。我々みんながこの学者先生のまわりに坐ると、彼はあたかも教書を伝達するかのようこの劇をこきおろした。この劇は致命的に誤った前提の上に立っている、と彼は言った。嘗てレディ（ステラのことを言っているのだが）だった女性がスタンレーのような俗物と結婚することはあり得ない、というのだった。我々は坐ったままで丁重に彼の言葉に耳を傾けたが、私はひそかにこの先生は決して性のよるこびを知らないのだと思った。．．．²⁰⁾

そしてステラの台詞にはこのウィリアムズの心中のつぶやきが「(なかばひとり言のように) ひと晩でも留守にされると、いても立ってもいられなくなるの……一週間でも家をあげられると気が狂いそう!」([*half to herself*]: I can hardly stand it when he is away for a night... When he is away for a week I nearly go wild! Scene I) や「でもねえ、男と女の間にはね、暗がりではいろいろなことがあるものよ——そのためほかのことはみんな、もうどうでもよくなってくるのよ」(But there are things that happen between a man and a woman in the dark... that sort of make everything else seem... unimportant. Scene IV) のように点在する。

父コーネリアスがスタンレー張りの男性臭と強引さで母エドウィナを捕えた事実はこゝでは省略するが、以上述べてきた事柄からだけでもその模様は想像できよう。たゞこの二人の性生活がスタンレーとステラのような激しいものだったかどうかは知るべき手掛りはない。しかしむしろステラのセクシュアルな面での二人の関係は、ウィリアムズ自身の性の体験からきたものと考えなければならない。他人の性生活があのように生々しく描けるものではないし、次のウィリアムズの告白もそれを証拠づけるものだからである。

私は玄関のベランダのブランコに、その金髪青年と並んで腰を下していた。夕やみのために私の左眼の濁りは目立たなかった。自分は<まとも>だといって抗弁する彼を説き伏せ、私の腕の中で一夜を過ぎない君の人生は不完全なのだ、と納得させるのに10分とはかからなかった。

『欲望という名の電車』の中のブランコのセリフにでてくるが、ミッチがブランコに向って、今まであなたを「まとも」だと思っていたのに、と言うとブランコが「まともってどういうこと？ 線や道路ならまっすぐなものもあるけど、人間の心は違うわよ。人間の心は山道のようにうねうねしているのよ」と言う。

その1940年の夏には30歳にもならないというのに私は淫乱のとりこになっていたのだ。そしてその淫乱はクライマックスに達しようとしていた。²¹⁾

こゝ『回想録』でウィリアムズは「淫乱」という言葉を男と男の関係で用いている。ウィリアムズ自身女性との交渉がなかったわけではないが——初恋の人ヘイゼルとはプラトニックだった、と言っているが、²²⁾ アイオワ大学演劇科に在学中、サリーという女性との行為について触れている²³⁾——ウィリアムズにとって性は想像以上に深い衝動とエクスタシーであったようだ。『欲望という名の電車』の書かれた1940年代は上記の如く、まさにウィリアムズの性的歓喜は頂点に達していた。

ブランコ・デュボアは、自画像という鏡に映し出そうとするにはかなり

複雑な人物である。「古き南部の栄光にしがみつく気取り屋」であるブランチは、『ガラスの動物園』のアマンダの血を引き、その「淫乱」さは、ウィリアムズ自身を偲ばせる。生涯次々と男色を漁ったウィリアムズは、自身をブランチに托しているかのようなのである。しかし、母親ゆずりの気取りもウィリアムズの血の中に流れてはいなかったか。ロバート・ライスが人間ウィリアムズを評して、「彼は、人を信じ易く疑い深く、心が広く利己的で、頼りなく独立独歩、臆病で大胆で、どこか抜けていて鋭く、控え目であって高慢で、内向的で社交家で、禁欲的で放縦で、怒りっぽく穏やかで、あやふやであって自信に満ちた、そういう人間のまさに米国における代表的人間の一人だ²⁴⁾」といったといわれるが、「私はブランチ・デュボアだ²⁵⁾」というウィリアムズの言葉もここに至って真実味を帯びてくる。そしてこの性格こそ、まさに現代的と思えるからなのである。それ故にブランチは文学史上不滅のキャラクターとなりうるとも言えるのではなからうか。

ウィリアムズの幼少の頃の性格については既に述べたように、やさしく、内気だった。しかし彼の成長の過程において色々の苦難に直面した。父の粗暴さ、それにまだくわしくは考察していないが母の偏執性——それは『ガラスの動物園』の中でアマンダの中に描かれている——、そして姉の精神異状。彼自身についていえばヘイゼルへの失恋——これはエドウィナによればコーネリアスが反対したといい、ウィリアムズによれば母が許してくれなかったということだが——。ミズリー大学の中退、そして意に副わない靴会社勤め。これらはウィリアムズに大きな影響を与えずにはおかなかった。そしてその結果がブランチというキャラクターとなってあらわれたのである。ステラはスタンレーに言う。「あの人の子供の頃を知らないからよ。あんなに素直で気のやさしい人は、だあれも外に、誰一人外にいなかったわ。それを、あんなみたいな人達がさんざんいじめ抜いたから、あんなふうに。」

(You didn't know Blanche as a girl. Nobody, nobody, was tender and

trusting as she was. But people like you abused her, and forced her to change. Scene VIII) そしてウィリアムズはこの苦しみの中で悲しみを知る。「悲しみは誠実さを育てるのよ」(Sorrow makes for sincerity, Scene III) とも、「少しでも誠実さのある人は悲しみを経験した人だわ」(The Little [sincerity] there is belongs to people who have experienced some sorrow, *ibid.*) ともブランチに言わせている。

ブランチ：私は決して強くもなく、自信もないわ。やさしい人は、やさしい人は強い人に頼らなければならないのよ、ステラ。魅力的でなければならないわ。美しい色をして、蝶の羽根のような——そして輝かねばね——夜の宿のためだけに一時の魔法を使うのよ。そのため私は最近あまりお行儀がよかったとは言えないわ。私は人の保護に走ったのよ、ステラ—次から次へとね。だって嵐—一面の嵐の最真中に私はいたんですもの。人はあなたを見ないわ—男の人はね——あなたに求める時でなければあなたの存在を認めてさえくれないわ。もしあなたが誰かに頼るのなら誰かがあなたの存在を認めてもらわなければならないのよ。そういうわけでやさしい人は——光り、輝くことが必要なのよ——電球にも色提灯をつけて。だって私は今恐いの——とても恐いのよ。これからどの位うまくやれるかわからないけどね。やさしいだけではだめだわ。やさしい上に魅力がなくなっちゃ。私は今やり場のない気持なの。

(BLANCHE: I never was hard or self-sufficient enough. When people are soft—soft people have got to court the favour of hard ones, Stella. Have got to be seductive—put on soft colours, the colours of butterfly wings and glow—make a little temporary magic just in order to pay for—one night's shelter! That's why I've been—not so awfully good lately. I've run for protection, Stella, from under one leaky roof to another leaky roof—because it was storm—all storm, and I was—caught in the centre. . . . People don't see you—*men* don't—don't even admit your existence unless they are making love to you. And you've got to have your existence admitted by someone, if you're going to have someone's protection. And so the soft people have got to—shimmer

and glow—put a—paper lantern over the light. . .But I'm scared now
—awf'ly scared. I don't know how much longer I can turn the trick.
It isn't enough to be soft. You've got to be soft *and attractive*. And I
—I'm fading now! Scene V)

この台詞には、1940年当時のウィリアムズの心境がまざまざと描き出されているのではあるまいか。自己の頼りなさ、誰かにすがりつきたい不安な心。そしてこれまで次々と相手を替えて沈溺した性の遍歴。柔弱な自分を偽装して目立とうとするもがきの心理。そのはい上ろうとするウィリアムズを如何ともしがたい無力感が包みこむ。

幼い頃からのソフトな性質、やさしい心は彼のとりまく暴虐な世界の中で痛めつけられる。しかし生まれながらの性格は鉄の性質に変わりはしない。彼は押し流されていく。這上らなければならぬと思う。自分の現在痛ましい姿は初恋のヘイゼルを自分から引裂いた者にある、と考える一方、同性愛にふける自分を責め——ブランチとアレン (Allen) とのこと——みんながいじめ抜いたために自分はこんな人間になったのだと他人をとがめる一方、その悲しみを知っているからこそ自分は誠実なのだ、と肯定する。

ブランチがスタンレーに犯される場面がこの劇のクライマックスであることはいうまでもないが、この悲劇的結末においてはブランチの合意があったか否かなども含めて種々取沙汰されている。なる程ブランチにスタンレーに対するコケットリーがいくつかの場面であらわされているが、二人の激しい言葉の葛藤から考えれば、その合意性も、スタンレーのレイプもやゝ不自然な感はまだぬがれない。むしろそのコケットリーはブランチ自身——ウィリアムズ自身——の中に先天的に存在する性格のものではないだろうか。又、スタンレーについていえば、なる程彼は雌を従える雄鶏のようではあるが、レイプを犯す悪人たる可能性には乏しい。彼はステラをこの上なくいとしんでいるのだ。たとえ一時的に乱暴、粗暴ではあるとして

も。更にステラがそのようなレイプを犯す可能性を秘めた男にこれ程夢中になるとも考えられない。たとえ、そのことに男女間の秘密が隠されているようにも、実の姉が夫によってレイプされた事実を知った後で、あのよう
に冷静で且つ直ちにスタンレーを許すことができるであろうか。又、ブラン
チに合意があったとすればどうして彼女は気が狂うのか。

それでは、スタンレーのレイプは何を意味するのだろうか。スタンレー
が父コーネリアスをモデルにしたという見解は既に述べたが、ウィリアム
ズはここでは父のあの逞しいエネルギーを借りて、限りなく残酷に“sissy”
な自分を抹殺しようとしたのではあるまいか。

ブランチの終焉は、現在の自己のすべて、同性愛と酒を含めての——ブ
ランチは酒がなければ生きられない——自己への訣別であり、ある意味で
は懐かしき過去への挽歌でもあるのだ。「どなたかは存じませんが、——
わたしはいつも、見ず知らずの方の御親切を頼りに生きてまいりましたの」
(Whoever you are... I have always depended in the kindness of
strangers. Scene XI) は、これまでウィリアムズに親切だった人達へ
の感謝の言葉であろう。ブランチの狂気はローズの悲しい運命にヒント
を得たものと思われるが、「じっさい、いま世界を照らすのはすさまじい稲
妻だ。美しい蛾は疫病に倒れていく。そしてブランチは処分されてしまっ
た——²⁶⁾」ウィリアムズは自分を処分したのである。ブランチを連れ去
る医師は、宴のあとを冷静にみつめるウィリアムズのもう一つの眼であろ
う。

(1986)

(注)

- 1) People have said and said and said that my work is too personal:
and I have just as persistently countered this charge with my assertion
that all true work of an artist must be personal, whether directly or
obliquely, it must and it does reflect the emotional climates of its
creator. (Tennessee Williams: *MEMOIRS*, Doubleday & Company, Inc.,

Garden City, New York, 1975), p. 188.

- 2) Benjamin Nelson: *Tennessee Williams*, (Ivan Obolensky, Inc., New York, N. Y. 1961) p. 148.
- 3) Before I was eight my life was completely unshadowed by fear. I lived in a small Mississippi town. My mother and my sister and I lived with our grandparents while my father travelled around the state, selling clothing to men. My sister and I were gloriously happy. We sailed paper boats in wash-tubs of water, cut lovely colored paper-dolls out of huge mail-order catalogs, kept two white rabbits under the back porch, baked mud pies in the sun upon the front walk, climbed up and slid down the big wood pile, collected from neighboring alleys and trash-piles bits of colored glass that were diamonds and rubies and sapphires and emeralds. And in the evenings, when the white moonlight streamed over our bed, before we were asleep, our Negro nurse Ozzie, as warm and black as a moonless Mississippi night, would lean above our bed, telling in a low, rich voice her amazing tales about foxes and bears and rabbits and wolves that behaved like human beings. (Ddwina Dakin Williams: *Remember Me To Tom*, [G. P. Putnam's Sons, New York, 1963] p. 19.
- 4) Hazel was imbued with a joy of living, somewhat like Rose in her early years. One of the most wholesome girls I ever met, she was very fair of skin with a reddish tint to her hair. The friendship between her and Tom might have ripened into romance if Cornelius had not interfered because he didn't think Hazel good enough for Tom. Her parents were divorced and she lived with her grandfather, who worked in the sales department of the International Shoe Company, a job inferior to my husband's. (*ibid.*, p. 60)
- 5) Hazel was a redhead with great liquid brown eyes and a skin of pearly translucence. She had extraordinary beautiful legs and her breasts developed early: she was inclined toward plumpness, like her

mother (who was sort of a butterball) but she had a good deal of height. In fact, when I was sixteen and Hazel fourteen, she had already outdistanced me in stature and had begun her habit of crouching over a little when she walked alongside me in public lest I be embarrassed by the disparity in our heights.

I suppose that I can honestly say, despite the homosexual loves which began years later, that she was the great extrafamilial love of my life. My mother did not approve of my attachment to Hazel, as it developed, nor for that matter had Miss Edwina ever seemed to want me to have any friends. The boys were too rough for her delicate son, Tom, and the girls were, of course, too "common."

This also applied, I'm afraid, to Miss Edwina's attitude toward my sister's friendships and little romances. And in Rose's case, they applied with more tragic consequences. (Tennessee Williams: *MEMOIRS*, p.15)

- 6) *Remember Me To Tom*, p. 143.
- 7) *Ibid.*, p. 29.
- 8) *MEMOIRS*, p. 10.
- 9) *Ibid.*, p. 16.
- 10) The story of my sister Rose's tragedy begins a few years before I commenced my three-year break from college to work for the Continental Shoemakers branch of the International Shoe Company.

I have mentioned that Rose suffered for several years from mysterious stomach trouble. She was several times hospitalized for this digestive trouble but no ulcer, no physical cause for the illness, could be determined. At last it was recommended that she have "an exploratory operation."

Luckily our family doctor, a brilliant physician, intervened at this point and told my mother, much to her dismay, that it was his (quite accurate) opinion that Rose needed psychiatric attention, the mysterious digestive upset being due, he thought, to psychic or psychosomatic

reasons that could be determined only through the course of analysis.

You can imagine how this struck Miss Edwina. (*ibid.*, p. 116.)

11) I think Miss Rose fell in love with a young man who did not altogether respond in kind; and Rose was never quite the same. A shadow had fallen over her that was to deepen steadily through the next four or five years. (*ibid.*, p. 117)

12) Rose had a "serious" St. Louis beau. He was a junior executive at International, a young man of very personable appearance, social grace and apparently of great and unscrupulous ambition. For a few months he was quite attentive to Rose. They dated, I think, several times a week, they were almost going "steady," and Rose would tremble when the telephon rang, desperately hoping the call was for her and that it was from him.

.....

But the scandal occurred—the episode at the all-night poker party at the Hotel Jefferson in which Dad lost an ear that had to be replaced by plastic surgery. This marked the beginning of the end for Dad's possible ascendancy to "the Board" at International.

It also marked the end of Rose's dates with her handsome and unscrupulously ambitious "beau," who no longer was a potential husband.

(*ibid.*, pp. 124-125)

13) But, unlike Laura, Rose was never a shy child, for she was the ringleader in games, and very spirited; perhaps too spirited at times as far as her father was concerned. (*ibid.*, p. 17)

14) There was great difference in their dispositions. Rose showed plenty of temper and temperament while Tom was usually quiet and calm and still is, in spite of the violence in his plays. I think his salvation was that he could express in words the conflicts he saw and felt around him. (*ibid.*, p. 22)

15) 母 Edwina については別の機会に取上げたいと思う。

16) My father's lineage had been an illustrious one, now gone a bit to seed, at least in prominence. He was directly descended from Tennessee's first senator, John Williams, hero of King's Mountain; from the brother Valentine of Tennessee's first Governor John (Nollichucky Jack) Sevier; and from Thomas Lanier Williams I, the first Chancellor of the Western Territory (as Tennessee was called before it became a state). According to published genealogies, the Seviers could be traced back to the little kingdom of Navarre, where one of them had been a ward of the Bourbon monarch. The family then became divided along religious lines: between Roman Catholics and Huguenots. The Catholics remained Xaviers; the Huguenots changed their name to Sevier when they fled to England at the time of St. Bartholomew's Massacre. St. Francis Xavier, credited with the conversion of many Chinese—a valiant but Quixotic undertaking, in my opinion—is the family's nearest claim to world renown.

My paternal grandfather, Thomas Lanier Williams II, proceeded to squander both his own and his wife's fortunes on luckless campaigns for the governorship of Tennessee. (*MEMOIRS*, p. 12)

17) A catalogue of the unattractive aspects of his personality would be fairly extensive, but towering above them were, I think, two great virtues which I hope are hereditary: total honesty and total truth, as he saw it, in his dealings with others. (*ibid.*, p. 13)

18) My father, Cornelius Coffin Williams, grew up mostly without the emollient influence of a mother, as the beautiful Isabel Coffin Williams died of TB at the age of twenty-eight. Consequently he had a rough and tough character. It was not softened at the military academy of Bellbuckle, where he spent much of his time in the guardhouse for infractions of rules; there he was fed only turnips, a vegetable which he never permitted to appear on our family table. After a year or two studying law at the University of Tennessee, he became a second lieutenant during the Spanish-American War, caught typhoid fever,

and lost all his hair. Mother claims that he remained good-looking till he took to drink. I never saw him during his time of abstention and good looks.

But heavy drinking was not a detriment to a Mississippi drummer. After a short career in the telephone business, he became a shoe salesman and was very popular and successful at this itinerant profession, during which he anquired a great taste for poker and for light ladies which was another source of distress to my mother. (*ibid.*, pp. 12-13)

19) *MEMOIRS*, p. 112.

20) *Streetcar* opened in New Haven in early November of 1974, and nobody seemed to know what the notices were or to be greatly concerned. After the New Haven opening night we were invited to the quarters of Mr. Thornton Wilder, who was in residence there. It was like having a papal audience. We all sat about this academic gentleman while he put the play down as if delivering a papal bull. He said that it was based upon a fatally mistaken premise. No female who had ever been a lady (he was referring to Stella) could possibly marry a vulgarian such as Stanley. (*ibid.*, pp. 135-136)

21) I have seated myself beside the the blond kid on the front porch swing. The dusk obscures my opaque iris of the left eye, and I don't think it took me more than ten minutes to convince him, despite his protestations of being "straight", that his life would not be complete until he'd passed an evening in my embrace.

(There's line in *Streetcar* which belongs to Blanche. Mitch has told her he'd thought that she was "straight," and she has replied, "What is straight? A line can be straight, or a street, but the human heart, oh, no, it's curved like a rode through mountains!")

Lechery possessed me, still under thirty, that summer of 1940. And it was approaching a climax. (*ibid.*, pp. 53-54)

22) *Ibid.*, p. 28.

23) *Ibid.*, p. 42.

24) 『英語青年』1983年7月号（石田章「影を生きた劇作家」）（研究社）.

25) 『戦後アメリカ演劇の展開』[有賀文康「テネシー・ウィリアムズ」]（文英堂，1983）

26) Nowadays is, indeed, lit by lightning, a plague has stricken the moths, and Blanche has been “put away” . . . , (*MEMOIRS*, p. 125).